



様々な価値観が浸透し、変化し続ける時代のうねりの中で、

今、柔道に何が求められるだろう。

柔道には本来、個性の数だけ、

皆に寄り添える魅力が存在する。

それは、心や身体を強くする手段として、

日常に活かせる学びの場として。

あらゆる場所であらゆる個性にひらかれた、

様々な柔道の姿がある。

これからも、時代は変わりつづける。

だからこそ私たちは、人々の想いを結びつづける。

みんなの個性を、もっと愛してゆくために。



みんなの
柔道
結び、つづける。

「長期育成指針」と「みんなの柔道」

長期育成指針とは

近年、柔道界は「柔道人口の減少」という問題に直面しています。これまでの懸念点は、指導者の不足と環境面の不備でした。また全日本柔道連盟が行った登録人口の減少に関する調査で明らかになったのは、「スポーツ離れ」。他の国々でも似た状況が見られ、特に、「勝敗」という視点のみの画一的な評価が影響しているとわかりました。

この問題に対処するため、本連盟は井上康生氏をチーフストラテジストオフィサーに迎え、2021年9月にブランディング戦略推進特別委員会を立ち上げ、小山勝弘先生（山梨大学名誉教授）、石井孝法氏と共に「長期育成指針」の策定に取り組みました。そしてオーストラリアやカナダ、イギリス、アメリカなどの長期育成のモデル（FTEM、LTAD、ADM等）を基に、現代社会における柔道の新しい役割と価値を再定義し、柔道に携わるすべての人が成長していけるように指針を作成。さらに、生涯を通じた発達のプロセスを6つの段階に分類し、各段階に適した育成方法を示しています。

今後私たちは「みんなの柔道」というスローガンのもと、年齢、性別、障がいの有無に関わらず、誰もが柔道を楽しめる環境作りに力を入れていく所存です。

長期育成指針 共同執筆者
石井孝法

共同執筆者 石井孝法より

長期育成指針について

全日本柔道連盟は、「柔道人口の減少」という問題を解決するために、長期育成指針を策定しました。この時代が求めるものに応じて、私たちは柔道の「競技性」のみに固執せず「人生の道」としての価値に焦点を当てるべきです。柔道が伝統的に持つ「柔術」という日本の文化的遺産を守りつつ、個人の成長、多様性を認め合い、社会への貢献を目指すべきと考えました。

そして、性別や障がいにかかわらず、日々の生活の中で困難に直面している全ての人々への配慮と支援の重要性を強調し、互いを尊重し合い、助け合う。こうした自他共栄の精神が、「みんなの柔道」というメッセージに込められています。

みんなの
柔道
結び、つづける。

石井孝法

「長期育成指針」への想い

私は、他国や他のスポーツ指導者たちとの交流から、日本の柔道界には、まだ指導者の質を高める改善の余地があると感じています。成長の第一歩は、「自分たちはまだ知識が足りない」、「もっと学ぶ必要がある」と認めることから始まります。その自覚から「学びのダイナミクス」が生まれ、私たち自身が成長し始めるでしょう。そして、私たちが変わることで、若い世代にも良い影響を与え、彼らの成長に繋がると期待しています。

ただし、ただ知識を伝えるだけでは十分ではありません。攻撃防御の稽古やスポーツとしての運動が、道場や競技場だけでなく地域社会全体で活かされることが重要です。地域の中で子どもたちを育て、大人たちも継続して学び続ける環境を作り、大人が学ぶ姿勢を子どもたちに見せる。そして彼らと一緒に学び、身体活動を通じて心も体も健康に育っていくこと。これが、私たちが目指す理想の姿だと思います。

長期育成指針の詳細や対談動画は
右記のQRコードからご覧ください。



石井孝法

対談

井上康生

SPECIAL TALK SESSION

「日本の柔道界に今、必要なこと」

昨今の「日本の柔道界」の課題は？

石井:井上先生が男子監督のとき「最強かつ最高。」というスローガンを立てられました。絶対に勝たないといけない状況で、なぜ「勝利」ではなく「最高」という言葉を使ったのでしょうか？その頃から柔道界の「課題感」を感じていたんでしょうか？

井上:もちろん勝負の世界で頂を目指すことには大きな価値があります。ですが私自身、「勝利以外」の柔道の価値や魅力により、ここまで育てていただいた

という想いがあります。しかしながら多くの人には柔道の「勝利以外の魅力」が伝わっていないんじゃないかと感じていました。その時の想いはこの「長期育成指針」の必要性にも通じますし、だからこそ非常に重要な指針になると強く感じています。



柔道の「あるべき姿」とは

井上:長期育成指針における大きなキーワードは「競技人口」です。石井さんはどのように「競技人口」の課題を捉えたのでしょうか？

石井:「自分たちにとって価値ある存在が社会的にはそうではない」という現実気づかされましたね。他国の「スポーツ離れ」に関する資料を調べると、意外にもオリンピックで結果を出してきた国のほうが各スポーツの競技人口が減っていることが分かりました。これは勝ち負けだけにこだわすぎた結果で、柔道も同様だと。そこで「長期育成指針」の中では「できる限り



多様な目標で柔道に取り組む」という視点を組み込んでいます。
井上:ただ、決して「競技が悪い」と言いたいものではありません。勝利は生きがいややりがいに繋がりますし、究極を求める姿勢や価値観は無くならないと私は思います。今新たに組み組もうとしている「革新的パスウェイ^(※)」には、柔道で何を学べるのか、学んで欲しいのかが集約されていきますから、これから柔道に興味を持つ方にとっても新たな指標になりうと思います。

※ 科学的手法で各人に適したスポーツ種目を識別し、組織的かつ計画的に国際選手として活躍できるよう競技力を向上させていくプロセス。偶然性を極力排除し、効率的に一流競技者を育成することが計画される。

井上と石井が考える「日本の柔道界」の未来

石井:私は柔道界の未来には、可能性に溢れていると思います。そのために例えば「教育」に関しても、僕たちのような柔道家が社会やコミュニティに参加して、子ども達に「礼」を伝え、対話し、育ててゆく。「おはよう」というコミュニケーションひとつから「挨拶は調和のために重要なんだ」と子ども達に学んでもらえたら。もしくは大人の学ぶ場に柔道が関わっていけたら素晴らしいなと。

井上:全く同感です。私が柔道から何を学んだかといえば、やはり「生きる力」。心身共に健康に生きていく術を、私は柔道を通して学ばせてもらいました。本来そんな力を持つものだと思うからこそ、勝敗だけでない、コミュニケーションや対話という視点に今後さらに注目し、みんなで文化

を作っていけたらと。私も柔道が大好きなので、心から祈っています。
石井:まずは自分たちが手本として自身の価値を実感し、多くの方々に柔道の魅力を伝えていきたいですね。まずは家族のような小さなコミュニティの中からでも少しずつ意識を変えていけば、次第に柔道界全体も変わっていくと信じています。

	PROFILE	石井孝法 / Takanori Ishii
長期育成指針共同執筆者、了徳寺大学教養部教授、日本武道学会常任理事、全日本柔道連盟ではブランディング戦略推進特別委員会を含む複数の委員会や、科学研究部に所属。日本柔道ナショナルチームのメンターや日本オリンピック委員会の専任情報科学スタッフを歴任。		

PROFILE	井上康生 / Kosei Inoue	
シドニーオリンピック柔道金メダリスト、東海大学スポーツプロモーションセンター教授、全日本柔道連盟ブランディング戦略推進特別委員会委員長、強化委員会副委員長。12年11月から21年9月まで全日本柔道男子監督をつとめる。		